

大学生のスポーツ・ボランティアのあり方

A Study on Sports Volunteers for University Students

中村学園大学 流通科学部

音 成 陽 子

キーワード：大学生 ボランティア スポーツ

I. 研究の背景と目的

中村学園大学が2016年3月に実施した平成28年度学生生活実態調査において、3学部の大学生2,481名におけるボランティアの実態は、「参加した」903名（36.4%）、「参加していないが、参加したいと思う」873名（35.2%）、「参加は考えていない」696名（28.1%）、無回答9名（0.4%）であった（図1）。「参加した」と回答した学生の学部の内訳を表1に示した。教育学部の参加率の高さは、他の学部に比べ2倍ほどになり、人と直接かかわることを学ぶ学部の特

性と考えられる。

「参加した」および「参加していないが、したいと思う」は70%を超え、ボランティアに対する意識の高さは伺える。しかしながら、「参加を考えていない」が約30%になることは見過ごすことはできないであろう。なぜならば、学生にとって身近なはずの九州では2016年4月に熊本を中心に震度7を記録する地震が起き、2017年7月に福岡県朝倉市や大分県日田市で豪雨災害が起きているからである。ボランティアは災害にとどまらず、福祉、環境、地域などその活

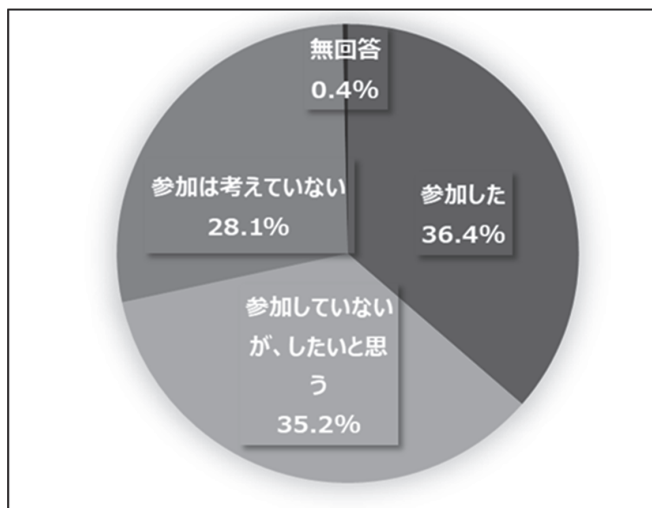


図1 大学生のボランティア活動の実態
中村学園大学（2017）平成28年度学生生活実態調査より作成

表 1 ボランティアに参加した（学部別）

	回答数 (n : 人)	参加したと回答 (a : 人)	学部回答者に占める割合 (a/n : %)
栄養科学部	779	194	28.8
教育学部	909	510	56.1
流通科学部	793	169	21.3

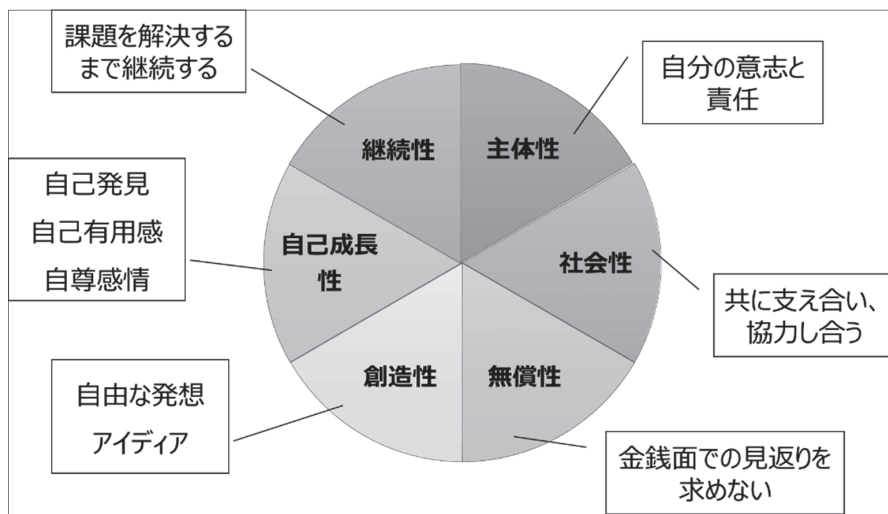


図 2 ボランティアの活動の性格

以下の文献より加筆作成

- ・厚生労働省・援護局地域福祉（2007）,「これからの地域福祉のあり方に関する研究会資料5」, http://www.mhlw.go.jp/shingi/2007/12/dl/s1203-5e_0001.pdf
- ・藤田久美編著ほか（2009）,「大学生のためのボランティア活動ハンドブック」, ふくろう出版, 4-7
- ・岡本栄一監編著ほか（2014）,「ボランティアのすすめ-基礎から実践まで-」, ミネルヴァ書房, 24-26

動は多岐にわたることから、社会に対して何ができるのかを意識することは重要だといえる。

ボランティアについて、厚生労働省（2007）は「自発的な意志に基づき他人や社会に貢献する行為」を一般的な定義としている。岡本ら（2014）は『さまざまな社会課題や矛盾に対しての疑問や怒りといった気づきを原点にして行う、金銭面でのみかえりを期待しない「個人発」

の主体的かつ社会連帯を基盤にした公共的活動である。』と述べている。

ボランティアの活動の性格として、厚生労働省（2007）、藤田ら（2009）、岡本ら（2014）から自発性、無償性、公共性・社会性、先駆性・開拓性、学習性・人間形成性、継続性が指摘され、図2のようにまとめることができた。

2020年東京オリンピック・パラリンピック開

催は、わが国におけるスポーツの価値を見直す良い機会になることが期待されている。全国大学体育連合（2017）は、大学生を対象にスポーツにおける体罰・暴力の経験やオリンピック・パラリンピックに対する意識、大学スポーツ推進に関する意識などの調査を行った。

以上のことを踏まえて本稿では、スポーツ・ボランティアについて検討を行うものとする。全国大学体育連合（2017）の調査データから、中村学園大学においてボランティア参加率が他学部ほど高くなかった流通科学部の学生を対象にスポーツ・ボランティアに対する意識について検討するものである。学生がどの程度、日常的にスポーツに親しみ、スポーツを楽しみ、スポーツを支えているのかを明らかにし、今後の生涯スポーツの指導の一助とするものである。

Ⅱ. 研究の方法

1. 大学生の調査

対象者は、中村学園大学流通科学部の学生538名（表2）を対象に2016年9月1日から11月16日に質問紙法で調査を行った。調査方法は、全国大学体育連合が2016年に行った大学生のスポーツ経験と意識に関する調査から対象学生を抽出して処理を行った。

質問は性別、学年、学部などの属性の他に、

今までのボランティアの経験やこれからやりたいボランティア、2020年東京オリンピックに関する質問など16項目である。回答に当たっては、値は全て数値化され、個人を特定することはないことを確認した上で承諾の上、回答してもらった。スポーツ実施状況、スポーツ情報を得るために利用するメディア、この1年間に経験したことのあるスポーツ・ボランティア、スポーツ・ボランティアのうちしたいもの、スポーツ・ボランティアをしたいと思っているのにできない理由について学年による検討を行った。統計処理にはIBM SPSS Statistics 22を使用し、有意水準を5%とした。

2. 福岡障がい者オープンバドミントン大会にてヒアリング調査

対象者、時期、ヒアリング項目は以下に示す。

①大会運営者2名（男性2名）

時期：2017年5月

ヒアリング内容 運営者からみた学生ボランティアに対する認識

②選手9名（男性5名、女性4名）

時期：2017年6月

ヒアリング内容：属性および競技者からみた学生ボランティアに対する認識

表2 対象学生

(人)	男子	女子	総計
1年	63	67	130
2年	53	105	158
3年	43	93	136
4年	38	76	114
総計	197	341	538

Ⅲ. 結果

1. 最近 1 ヶ月間の運動・スポーツへの取り組み

調査時の最近 1 ヶ月において運動・スポーツを「している」のは、1 年が 79 名 (60.8%) と最も高い割合を示し、次いで 4 年、2 年、3 年という結果だった。一方、「していない、するつもりもない」は 3 年 43 名 (31.6%) が最も高い割合を示し、次いで、2 年、4 年、1 年の順だった。そこで、運動実施状況と学年の関連についてカイ 2 乗独立性の検定を行ったところ、 $p=0.0445<0.05$ で有意な関連がみられた。

2. スポーツに関する情報を得るための手段 (複数回答)

図表 1 にスポーツに関する情報を得るための手段を示した。テレビは 1 年 81 名 (55.1%)、2 年 119 名 (72.1%)、3 年 108 名 (73.5%)、4 年 73 名 (54.5%) で最も高い割合を示した。インターネット (SNS) および雑誌は 1 年 25 名 (17.0%) が最も高く、新聞は 4 年 11 名 (8.2%) が最も高かった。そこで、スポーツ情報を得る手段と

学年の関連についてカイ 2 乗独立性の検定を行ったところ、 $p=0.139>0.05$ で有意な関連はみられなかった。

3. 過去 1 年間に経験したスポーツ・ボランティア

図 4 に対象学生の過去 1 年間のスポーツ・ボランティアの経験について示した。「したことがある」回答が最も高かったのは 1 年 48 名 (36.9%)、次いで 4 年 40 名 (35.1%) であり、いずれも 35% 以上の割合を示した。一方、3 年が最も低く、25 名 (18.4%) と 20% に満たない割合であった。そこで、スポーツ・ボランティアの経験と学年の関連についてカイ 2 乗独立性の検定を行ったところ、 $p=0.0104<0.05$ で有意な関連がみられた。

また、経験したことのああるスポーツ・ボランティアの内容 (複数回答) を図表 2 に示した。1 年は「スポーツの指導」および「スポーツの審判」がいずれも 25 名 (52.1%) 最も高かった。2 年は「スポーツの審判」19 名 (54.1%)、次いで「大会・イベントの運営や世話」13 名

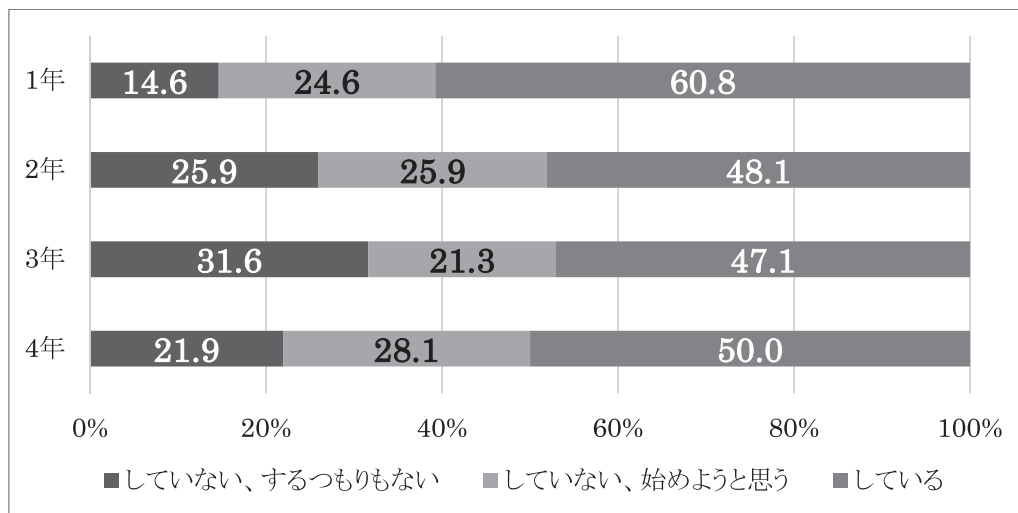
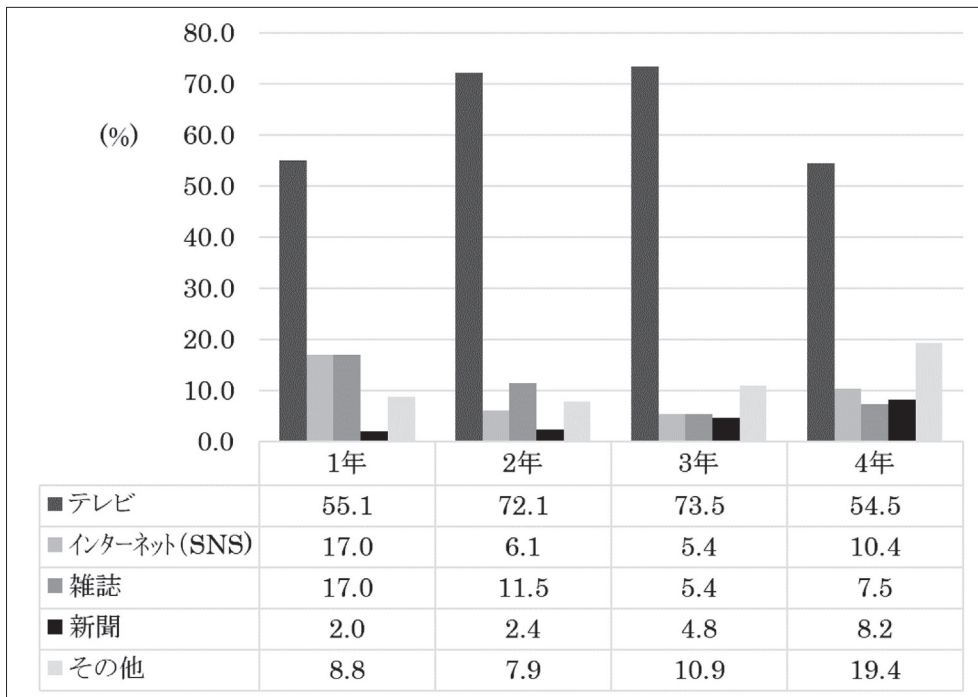


図3 最近 1 ヶ月間の運動・スポーツへの取り組み

(カイ 2 乗値=12.911 $p=0.0445<0.05$)



図表 1 スポーツに関する情報を得るための手段（複数回答）
 (カイ 2 乗値=17.292 $p=0.139>0.05$)

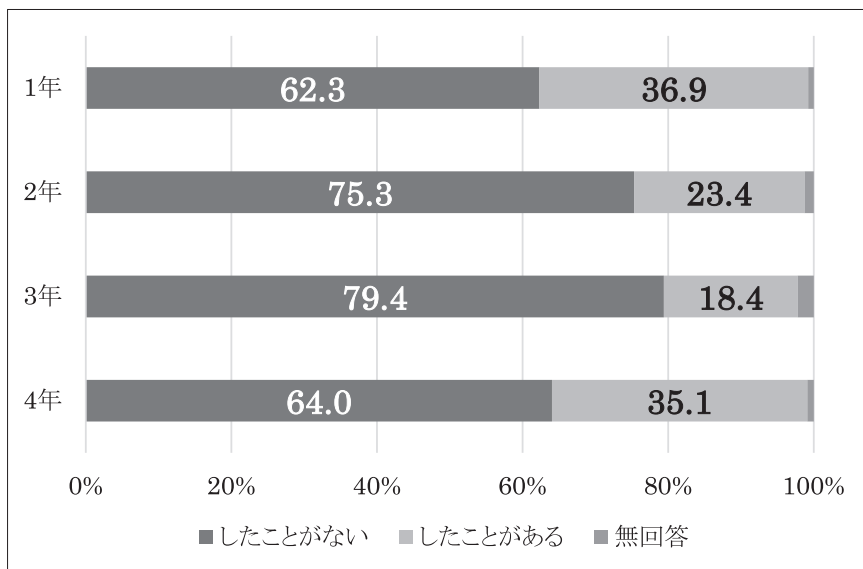
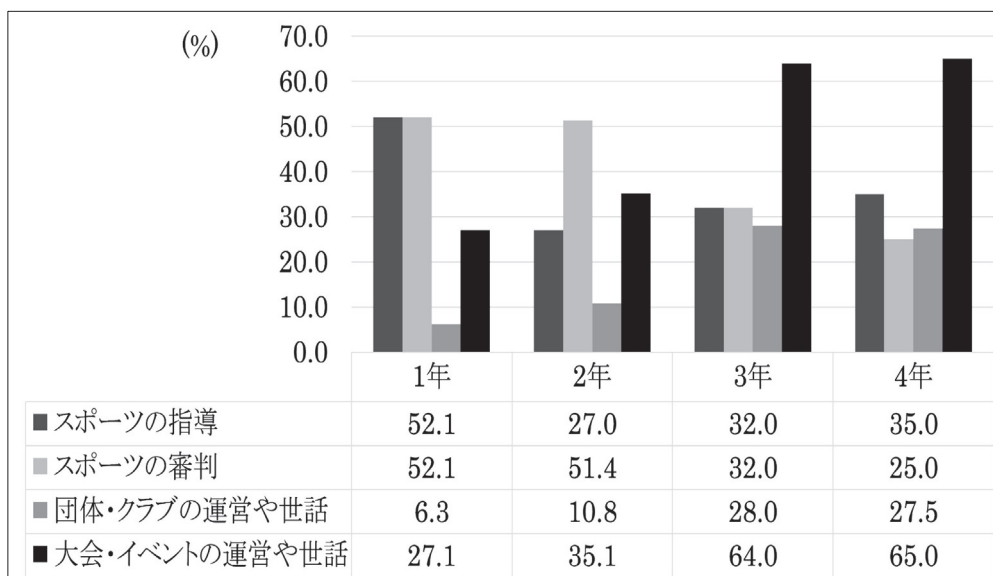


図 4 スポーツ・ボランティアの経験
 (カイ 2 乗値=16.703 $p=0.0104<0.05$)



図表2 経験したことがあるスポーツ・ボランティアの内容（複数回答）

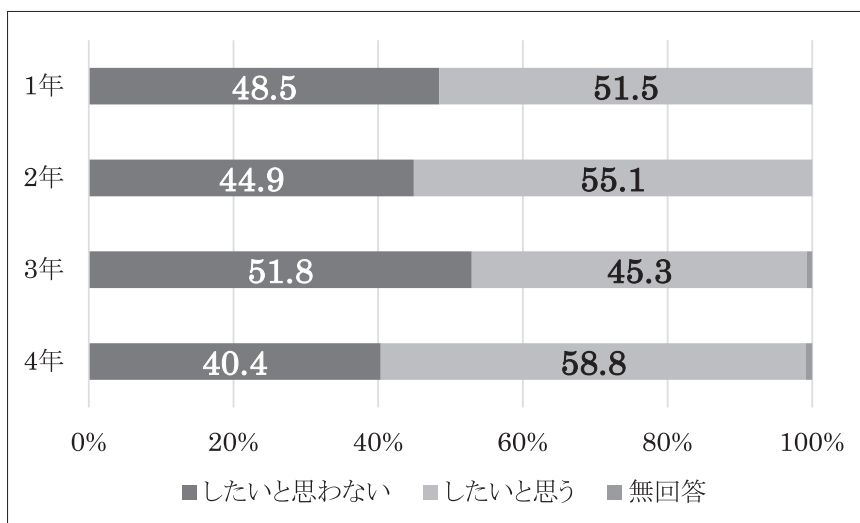


図5 スポーツ・ボランティアをしたいか

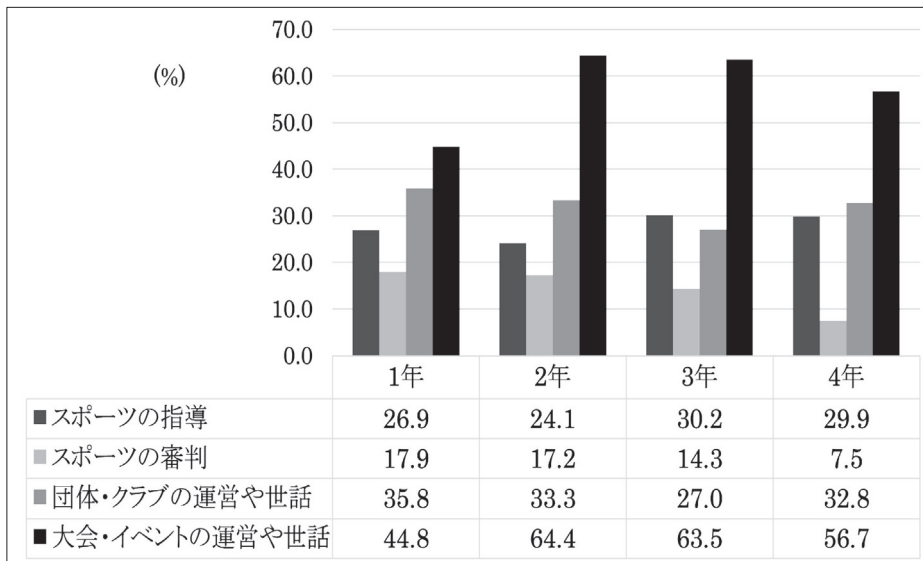
(カイ 2 乗値=6.6187 p=0.3513>0.05)

(35.1%) で高い割合を示した。3年および4年は「大会・イベントの運営や世話」が、それぞれ16名（64.1%）、26名（65.0%）で最も高かった。3年および4年は、1年および2年と比べると「団体・クラブの運営や世話」が高い

傾向にあった。

4. スポーツ・ボランティアをしたいか

図5にスポーツ・ボランティアをしたいと思うかについての結果を示した。その結果、「し



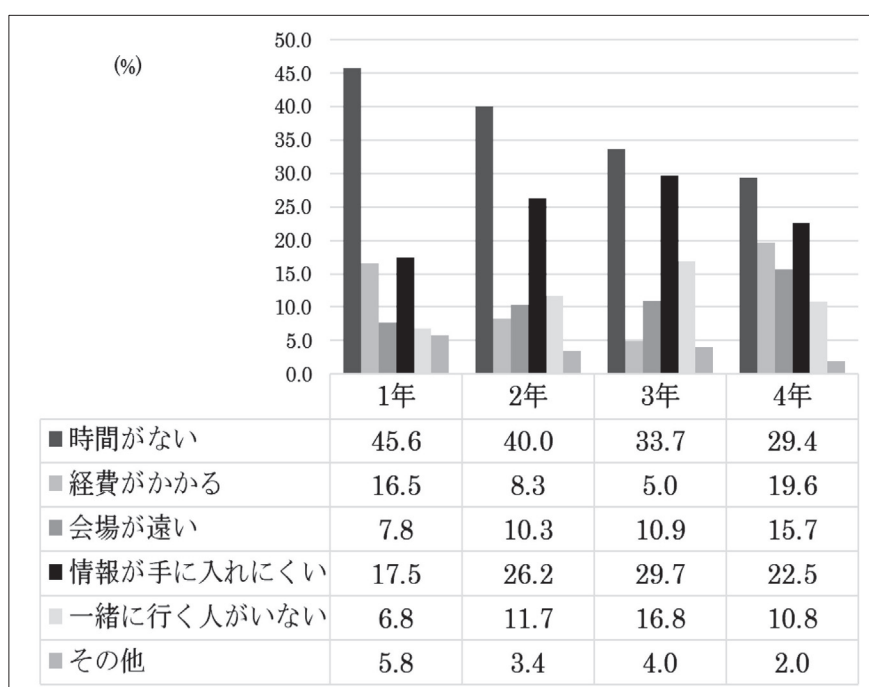
図表3 したいと思うスポーツ・ボランティア（複数回答）

たいと思う」という回答は1年67名（51.5%）、2年87名（55.1%）、4年67名（58.8%）と半数以上を示し、3年のみ「したいと思わない」が72名（51.8%）で半数を超えた。そこで、スポーツ・ボランティアをしたいかと学年の関連についてカイ2乗独立性の検定を行ったところ、 $p=0.3513>0.05$ で有意な関連はみられなかった。

また、したいと思うスポーツ・ボランティア（複数回答）を図表3に示した。すべての学年において、「大会・イベントの運営や世話」が最も高く、「スポーツの審判」が最も低かった。「スポーツの指導」や「スポーツの審判」が低い割合となるのは、対象スポーツの知識や技術、資格などが必要であるからだろう。

5. スポーツ・ボランティアができない理由（複数回答）

図表4にスポーツ・ボランティアができない理由を示した。いずれの学年においても「時間がない」、「情報が手に入りにくい」の順に高い割合を示した。次いで高い割合を示すのは、1年および4年では「経費がかかる」であったが、2年および3年では「一緒に行く人がいない」であった。「時間がない」という理由については、学年が上がるにつれて減少する傾向がみられた。時間については、履修科目数や大学生活、アルバイトなど時間のゆとりが関係していることが推察できる。そこで、スポーツ・ボランティアができない理由と学年の関連についてカイ2乗独立性の検定を行ったところ、 $p=0.0089<0.01$ で有意な関連がみられた。



図表4 スポーツ・ボランティアができない理由（複数回答）

(カイ 2 乗値=35.223 p=0.0089<0.01)

6. 福岡障がい者オープンバドミントン大会の運営者へのヒアリング調査

スポーツ大会を運営する上で、運営者からみた学生ボランティアに対する認識についてヒアリング調査の結果を以下に示す。大会運営側にとってボランティアは、大会運営や選手を支えるだけでなく、スポーツ振興ということも考えて依頼していることがわかった。今回の大会は、障がい者スポーツということもあり、特に、障がいに対する理解、障がい者スポーツの認知ということが調査でうかがえた。

Q 1. ボランティアを依頼して良かったことは何ですか。

A 1. 多くの方に障がい者スポーツやこのような大会（筆者注：福岡障がい者オープンバドミントン大会）が行われていること

に興味を持ってほしい。できれば、これから先、長くこの業界に関わる人材をつくりたいという狙いもある。

Q 2. ボランティアを依頼して困ることは何ですか。

A 2. 大学や学部、専攻も様々なので、まったく興味がない状態で来られる方もいるため、遊び心がでることがある。大学や団体さんに一括してお願いをしているので、知り合い同士で来られることが多いこともあり、お喋りすることがある。運営する側からするとそれくらいあってもいいと感じるが、大会に参加する方からするとボランティアもスタッフの一員にみえるため、お喋りが気になることもある。

Q 3. ボランティアは、学生と一般の人とではちがいますか。

A 3. 一般の方は少しでも興味や知識、経験がある状態から来られる方が多い。学生はまったく知識がない状態や初めてといった場合が多い。しかし、その方がボランティアや運営に興味を持っていただけの機会にもなるので大歓迎である。

Q 4. 事前研修は必要と思いますか。

A 4. できることならしたい。しかし、ボランティアの方の貴重な時間を使わせていただくこと、そのための交通費や場所の確保などが難しいうえ、事前研修をして自分たちができるボランティアをしていただけの方への対価が今のところまだできない。

Q 5. 一般の方の募集しているのか。

A 5. 基本的に H.S.S.会登録（サポートスタッフ登録者）者を対象に募集をしている。H.S.S.会登録をしていると経験のあるスポーツや興味のあるスポーツなどが登録しており、大会に合わせてマッチする方に募集をかけている。また、大学間のつながりも大切にしている。

Q 6. 私たちがバドミントン大会の運営のボランティアをさせて頂いた際、他大学の方や一般の方と協力して行ったが、バドミントン大会に関わらず、他の大会や取り組みでもボランティアの人数は足りているのか。

A 6. バドミントン大会を含め基本的に足りていない。大会を運営する、滞りなく回す、

という点では足りていないこともない。しかし、先にも述べたが、大学生の方にボランティアしていただくときは、取り組みを知っていただき、運営をしながらスポーツの迫力を感じてほしい。合間を見つけて観戦してほしいため足りているとはいえない。

筆者注) H.S.S 会 (Handicapsports Support System)

障がい者のスポーツやレクレーション活動を支援するため、福岡市スポーツ協会の支援組織として平成6年4月1日より活動している。

筆者注) FHS の会 (福岡県ハンディーキャップスポーツ・サポートの会)

(公財) 日本障がい者スポーツ協会公認の障がい者スポーツ指導員および、障がい者スポーツ指導員養成講習会修了者で構成されており、福岡県障がい者スポーツ協会主催の大会や教室等で活動する。

7. 福岡障がい者オープンバドミントン大会の参加選手へのヒアリング調査

ヒアリング調査を行った選手は20歳代女性1名、30歳代男性2名、40歳代男性2名および女性2名、50歳代女性1名、60歳代男性1名の計9名だった。調査対象選手の職業(表3)は、会社員女性1名、公務員女性1名、団体職員男性3名および女性1名、自営業男性2名および女性1名だった。調査対象選手の競技レベルは、表4に示した。

図6は選手に対して「Q. 大学生ボランティアは社会人のボランティアと比べて、どのように違いますか。」を尋ねた結果である。大学生と社会人に違いがあると思っている人が多い項目は「やる気」、「若さ」、「真面目さ」というこ

表 3 選手の属性

(人)	男 性					女 性				
	20 歳 代	30 歳 代	40 歳 代	50 歳 代	60 歳 代	20 歳 代	30 歳 代	40 歳 代	50 歳 代	60 歳 代
会社員								1		
公務員									1	
団体職員		2			1	1				
自営業		0	2					1		
総計		2	2		1	1		2	1	

表 4 選手の競技レベル

(人)	初心者レベル	地域大会レベル	全日本レベル	国際大会レベル
男子	1	3	1	
女子		1	1	2
総数	1	4	2	2

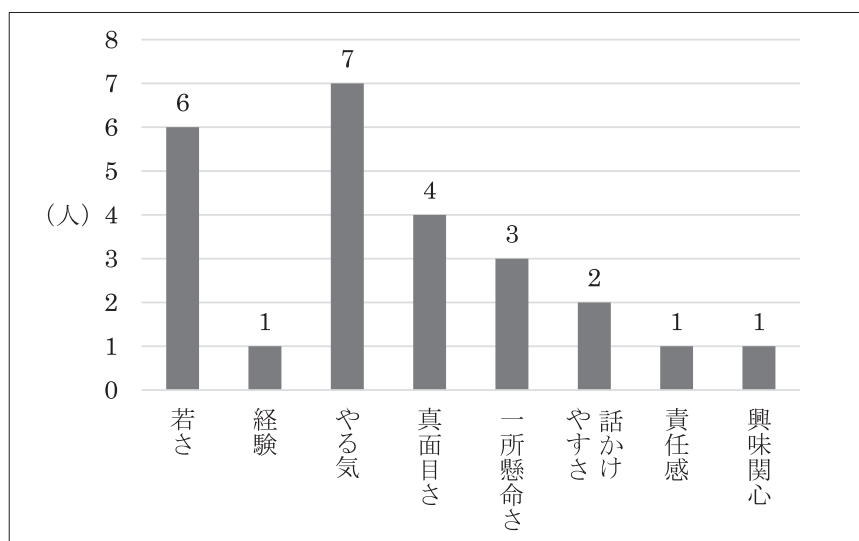


図 6 ボランティアにおける大学生と社会人の違い

とがわかった。一方、経験や責任感、興味関心は、大学生と社会人に大きな違いがないと思っている人が多いこともわかった。

自由記述からは、学生ボランティアに対して好印象、要望、期待の3つに分類することができた。詳細は以下に示す。自由記述から選手はボランティアに対して、障がいについての基礎知識を持ってほしいこと、コミュニケーションをとりたいと思っていることがわかった。

- (好印象) ・ 地元の大会でボランティアをして頂いているので感謝
 - ・ 学生ボランティアが増えた方がよい
 - ・ 一生懸命やってもらっているので充分
 - ・ ボランティア活動を通して一緒にバドミントンを楽しめることを知った
- (要望) ・ 気配り目配りをもっとしてほしい
 - ・ 一人一人考えて行動すること
 - ・ 車イスの勉強をしてほしい
- (期待) ・ 一緒にバドミントンをする機会があればいい。
 - ・ 積極的にコミュニケーションをとりたい

IV. 大学生のスポーツ・ボランティアのあり方

1. スポーツ・ボランティアに参加すること

過去1年間のスポーツ・ボランティアの経験は本稿の対象学生全体では27.9%で、全国大学体育連合（2017）の57.9%を大きく下回った。ちなみに、大学体育連合（2017）における中村学園大学教育学部の学生のボランティアを経験した学生は41.8%であった。これらのことから、本稿の対象学生の学部の特性に関係があると推

察される。つまり、人のために何か（教育や保育）をすることを前提に学修する学部の所属することが、教育学部の学生のスポーツ・ボランティア経験を有する割合を高くしたと考えられる。しかしながら、流通科学部は社会とかかわる・働くことを前提に学修するのであれば、社会に対して自分は何ができるかを意識してもよいのではないだろうか。この点について、松本（1999）はスポーツ・ボランティアの参加動機を「自発的貢献型」「他律対価型」「主体的レクリエーション型」「義務的参加型」の4つに分類したうえで、愛他的なボランティア動機を主として多用な参加動機を有していることを明らかにしている。

ボランティア活動ができない理由はスポーツを実施できない理由と共通点があることが示唆される。SSF スポーツライフ調査委員会によるスポーツライフ・データ2016では、スポーツができない理由として「時間がない（53.8%）」「機会がない（27.8%）」となっていた。平成28年にスポーツ庁のスポーツ実施調査においても、「仕事や家事が忙しいから（32.8%）」「面倒くさいから（24.0%）」「お金に余裕がないから（14.2%）」であった。これらのことから、何かの活動を行う際には、何かしらのきっかけが必要になるのではないだろうか。例えば、健康のためや友人からの誘いをスポーツ開始の機会とすることがある。森（2008）はボランティアの参加のきっかけおよび情報収集について、次のように述べている。『（以下引用）「友人や知人に誘われたから」という答えが多く返ってきます。「前から関心があって」や「自分で情報を調べて」、「チラシなどを見て」といった回答は少数です。』横須賀市のボランティア活動に関するアンケート調査（2010）においても、ボランティア活動のきっかけとして「友人などからの誘い（41.2%）」が最も高く、10歳代では66.7%、20歳代では59.4%となっていた。次いで「行政からの情報（27.6%）」であった。水野ら

(2007)によれば、積極性があり、コミュニケーション能力が高い者がボランティア活動に関心を持ちやすいという。また、活動の経験を希望する者は過度に期待をすることから十分な情報提供が必要とも述べている。したがって、大学生がボランティアに参加するためには、一緒に活動する仲間の存在、情報の量と入手の容易さが重要といえる。

2. スポーツ・ボランティア活動をすること

生涯にわたってスポーツに親しむ態度には、「する」「みる」「ささえる」の3つがある。スポーツ・ボランティアの活動は、「ささえる」スポーツにあたるといえる。したがって、スポーツをする人をささえる、スポーツチームをささえる、スポーツ大会をささえるということになるだろう。しかしながら、ヒアリング調査において、ボランティアを受入れる側からは、障がい者スポーツへおよび障がい者に対する理解・認知の向上、ボランティアと選手とのコミュニケーションなどがあがってきた。

塩田ら(2016)は、障がい者スポーツのボランティア行動を行う要因について、観戦行動、体験行動をあげている。特に、直接経験は理解という点において、高い効果を示すという。さらに、直接交流はボランティアと障がい者の双方に、共生・平等意識、多様な価値観、能動的行動など良い効果をもたらすことを示唆している。音成(2016)はボランティア活動を行うことは自尊感情を高める傾向にあることを示唆している。豊田ら(2007)はスポーツ・ボランティアの経験による自己変容について、獲得した積極性は自己の生活世界へ凡化すると述べている。さらに、スポーツ・ボランティア個人が実体験から自己の意味づけを行い、自己の中から新たな価値観を新たに掘り起こしていくことから「発掘型体験学習」と称している。音成(2016)はボランティアを行うことで主体性、働きかける力、発信力、傾聴力、状況把握力が高まると

いう結果を得ている。

しかしながら、豊田ら(2007)は、自己変容には積極的变化だけでなく、消極的变化もみられたと述べている。つまり、スポーツ・ボランティア活動を通じて肯定的な自己変容を伴わず消極的变化にとどまる者がいたという。その要因として、報酬を目的としないというボランティアの定義に反する関わりを求めるといことがあげられた。

これらのことから、大学生がスポーツ・ボランティアを行う意義として、ボランティアの定義を理解すること、地域や社会に貢献できるという体験をすること、日常の環境とは異なる社会に触れ価値観が拡大することがあると考えられる。

大学生にとってのスポーツ・ボランティアは、スポーツについて知識が得られる、興味関心が高まる、視点が変わる、魅力に気づくというスポーツの理解が深まるといえる。スポーツ・ボランティアの活動に対しては、他者から評価(感謝、要望、期待)されることで、随伴経験(自分の行動に成果が伴う経験)をすることが推察される。さらに、生涯スポーツという視点からみると、学校体育の中で培われてきた「する」「みる」に加えて、「ささえる」という新しいスポーツ経験の場を獲得することができるだろう。つまり、スポーツ・ボランティアのあり方の一つとして、生涯スポーツにつながる「ささえる」スポーツとして位置することができるのではないかと考える。スポーツ・ボランティアは人や社会に貢献するのみならず、スポーツ振興にも貢献するものであるといえるだろう。

V. まとめ

我が国は2019年ラグビーワールドカップ、2020年東京オリンピック・パラリンピック、2021年関西ワールドマスターズゲームズと世界規模のスポーツ・イベントが集中するゴールデンスポーツイヤーを迎える。これらスポーツ・

イベントを運営するためにはスポーツ・ボランティアが欠かせない。そこで、文系学部 of スポーツ・ボランティアのあり方を検討するために、中村学園大学流通科学部の学生538名を対象に質問紙調査を行い、学年による検討を行った。あわせて、障がい者スポーツ大会の運営者および参加選手に対しても、ヒアリング調査を行った。その結果、以下のようなことがわかった。

- スポーツ・ボランティアの経験と学年の関連について有意な関連 ($p < 0.05$) がみられた。
- ボランティアができない理由は、「時間がない」、「情報が手に入りにくい」であり、学年の関連について有意な関連 ($p < 0.01$) がみられた。
- 大会運営側にとってボランティアは、大会や選手をささえるだけでなく障がい者スポーツの振興の一環でもあった。
- 大会の選手からみて大学生と社会人に違いはやる気、若さ、真面目さだった。加えて、ボランティアに障がいについての基礎知識を持っていたほしい、コミュニケーションをとりたいと思っていた。

大学生にとって、活動の際には、一緒に活動する仲間や活動するための時間のゆとりも必要である。しかしながら、他者や社会に貢献すること、経験によって積極性や主体性などの自己変容も獲得できることがある。さらに、スポーツ・ボランティアはスポーツに親しむという生涯スポーツの「ささえる」スポーツの実践であるといえる。したがって、生涯スポーツの「ささえる」スポーツについても、「する」「みる」同様に大学体育の中に組み込んでいくことが考えられる。これによって、大学生はスポーツ・ボランティアの情報や活動の機会を得て参加しやすくなる、運動の得意・不得意や運動経験に左右されない評価項目を得る、学外の人との協働やサポートによって随伴経験をするというメリットがある。さらに、「するつもりもない」

「始めようと思う」にとどまっていた大学生を「したことがある」「している」への行動変容も期待できるかもしれない。そして、大会運営側にとっては、マンパワーの確保とスポーツ振興というメリットが生じる。ただし、指導する教員および大学の事務組織においては、大学生と大会運営側との調整や事務処理といった業務が負担となる場合があることに留意する必要があるだろう。

なお、本研究は学生に対する調査が横断的調査であるため、実際に大学の在学年数による変化をみることができていない。また、性別によるスポーツ・ボランティアのあり方に言及できていない。これらについて、今後の研究の課題としたい。

VI. 謝辞

本研究に際し、ご協力いただいた中村学園大学の学生ならびに先生方、福岡市立障がい者スポーツセンター、福岡障がい者オープンバドミントン大会の選手のみなさん、その他関係者各位に感謝申し上げます。

【参考文献】

- 藤田久美編著ほか (2009), 「大学生のためのボランティア活動ハンドブック」, ふくろう出版, 4-7
- 厚生労働省・援護局地域福祉 (2007), 「これからの地域福祉のあり方に関する研究会資料 5」, http://www.mhlw.go.jp/shingi/2007/12/dl/s1203-5e_0001.pdf
- 松本耕二 (1999), スポーツ・ボランティアの類型化に関する研究：障害者スポーツイベントのボランティアに着目して, 山口県立大学社会福祉学部紀要 5, 11-19
- 水野邦夫・加藤登志郎 (2007), 「ボランティア活動への参加は個人の心理的成長に寄与するか？—ボランティア活動経験とパーソナリティ特性, 社会的スキル, 充実感, ボランティア活動観の関連性からみた一考察—」, 聖泉論叢 15, 141-156
- 森 保文 (2008), 【研究ノート】人はなぜボランティア活動に参加するのか?, 国環研ニュー

- ス27巻, 6-7, 2008年 8 月
- 中村学園大学 (2016), 平成28年度学生生活実態調査 6. 詳細集計結果 Q13. ボランティア活動への参加状況
- 岡本栄一監編著ほか (2014), 「ボランティアのすすめー基礎から実践までー」, ミネルヴァ書房, 24-27
- 音成陽子 (2016), ボランティア活動が学生に与える影響ー自尊感情と社会人基礎力ー, 通科学研究16(1), 39-46
- 塩田琴美・徳井亜加 (2016), 障がい者スポーツにおけるボランティア参加に影響を与える要因の検討, 体育学研究 61, 149-158
- SSF スポーツライフ調査委員会編 (2017), 「スポーツライフ・データ2016」, 笹川スポーツ財団
- スポーツ庁 (2016), スポーツの実施状況等に関する世論調査 (平成28年11月調査), http://www.mext.go.jp/sports/b_menu/toukei/chousa04/sports/1381922.htm
- 豊田則成・金森雅夫 (2007), スポーツ・ボランティアを経験することの意味とは? びわ湖大学駅伝にボランティア参加した本学学生の「語り」から, びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要 4, 9-18
- 横須賀市 (2010), 調査報告書「ボランティア活動に関するアンケート調査結果ーボランティアポイント制度に関する意見のまとめー」, 2010年 9 月
- 全国大学体育連合 (2017), 「大学生のスポーツ経験と意識に関する調査報告書」